

〔論文〕

名古屋学院大学建学の精神「敬神愛人」の源流を辿る

—内村鑑三の「真空 (vacuum)」概念を手掛かりに—

文 禎 顕

名古屋学院大学経済学部

要 旨

1895年刊行された内村鑑三の自伝的作品“*How I became a Christian: Out of my diary*”の中に言及される真空 (vacuum) という内面的問題が解決されていく過程において彼はキリスト教信仰の神髄を体得し、キリスト者としてのアイデンティティを確立するようになる。本研究は、若き内村のキリスト教信仰の根幹を揺さぶっていたその真空の正体を明らかにする中で、名古屋学院大学の前身である名古屋英和学校で教員として働いていた頃の彼が謳っていた「キリスト教的兄弟愛」(Christian Brotherhood) の意味を分析することによって建学の精神「敬神愛人」の源流を辿ることを試みる

キーワード：建学の精神, 敬神愛人, 内村鑑三, 真空

Pursuing the origin of Nagoya Gakuin University's founding spirit “Fear God, Love People.”

—Using Kanzo Uchimura's concept of emptiness—

Jungho MOON

Faculty of Economics
Nagoya Gakuin University

1. はじめに

1.1. 建学の精神のキリスト教的背景

建学の精神を英語で訳せば、**Founding Spirit**と表すことができる。「建学の精神」の精神に当たる英語は**spirit**であるが、この語はラテン語の**spiritus**を語源とする。**spiritus**には息、霊、エネルギーなどの意味がある。**spirit**と語源的関係がある英語**inspire**（靈感を与える）、**respire**（呼吸する）などの動詞はラテン語**spiritus**の動詞**spiro**を語源とする。この**spiro**は「呼吸する」、「息をする」、「息を吹く」などの意味として使われる。ここで**spirit**の語源であるラテン語**spiritus**と**spiro**の意味において目立つのは息、呼吸という言葉であることが分かる。

聖書には、神の息によって人間の魂が生まれ、イエスキリストの息によって教会の中に命が吹き込まれるとある。

「それから、主なる神は、土から塵の人間を形作り、ご自分の命の息を鼻に吹き入れられた。こうして人は生きる魂に造られた¹⁾」（私訳、『創世記』2:7）。

「（イエスは）そうおっしゃってから、彼らに向かって息を吹きかけた。そして次のように仰る。『**聖霊（Spiritum Sanctum）を受けなさい**』²⁾」（私訳、『ヨハネによる福音書』20:22）。

旧約聖書『創世記』においては神の息によって人間に魂が、新約聖書『ヨハネによる福音書』においてはイエスキリストの息によって教会に命が与えられるようになったという聖書の記事を、キリスト教は創造と救済に関する重要な根拠としてきた。このようなことから考えると、長い歴史の中でラテン語を公用語としてきたヨーロッパや、ヨーロッパから様々な影響を受けたアメリカなどキリスト教的背景をもつ世界においては**spirit**が神によって与えられたものとして理解されてきたと推測することは難しくない。

ここでは**spirit**について神学的議論は控えたいが、特に新約聖書において**spirit**が基本的に次のような意味として使われているということはキリスト教主義大学の建学の精神を理解するにおいて参考になるであろう。

①神と真理は**spirit**である³⁾。

②人間も**spirit**をもつが、人間の**spirit**は神の力によって支えられるものとして、滅びてしまう**body**（体）や**flesh**（肉）とは対照的な部分として捉えられる傾向がある⁴⁾。

③人間が**spirit**であり真理である神に近づく方法は、**spirit**と真理において行われる霊的礼拝である⁵⁾。

1) 『創世記』2:7 (Vulgata) “tunc formavit Dominus Deus hominem pulverem de humo et inspiravit in nares eius spiraculum vitae, et factus est homo in animam viventem.”

2) 『ヨハネによる福音書』20:22 (Vulgata) “Et cum hoc dixisset, insufflavit et dicit eis: “Accipite Spiritum Sanctum.”

3) 『ヨハネによる福音書』4:24, 『ヨハネによる福音書』14:17, 『コリントの信徒への手紙二』3:17

4) 『ローマ人への手紙』8:10, 『ヨハネによる福音書』3:6

5) 『ヨハネによる福音書』4:24

このように、神の息にその起源を置き、真理のような非物質的価値に向かって開かれ、成長するように意図された spirit の聖書的意味を踏まえる場合、キリスト教主義大学の建学の精神には「スクールモットー」のような表現では収まらない意味があると考えられる。こういうキリスト教的背景を考慮して建学の精神の特徴について述べるとしたら、以下のようにまとめられるであろう。

- ①人間の命の根源である神の息（神の霊）に導かれた学校創設者のキリスト教的精神である。
- ②この精神は真理のような非物質的価値に導き、
- ③学校運営や教育活動全般に行き渡って息づいているものとして、学校に存在意義と活力を与える。
- ④こうして学校のすべての構成員を一つの spirit にまとめ、彼らの情熱を引き出し、学校の気質や在り方などを形作っていく。

キリスト教プロテスタント系の名古屋学院大学の建学の精神は、名古屋学院の創設者であるフレデリック・チャールズ・クライン（以下、クライン博士と表記）によって掲げられた「敬神愛人」である。本研究は、名古屋学院大学の前身、明治時代名古屋英和学校で教員として働いていた頃の内村鑑三が謳っていた「キリスト教的兄弟愛」の意味を明らかにすることによって、建学の精神の源流を探ることにする。このような試みは、名古屋学院大学をはじめ日本の多くのキリスト教主義学校の建学の精神の実現に確かな根拠を与えるに違いない。

1.2. 研究の動機と方法

- ①筆者は数年間非常勤講師としてのキャリアを積んだ後、2016年4月から名古屋学院大学で常勤（任期制）として初めて勤務するようになった。教育現場ではキリスト教関係の必修科目を教えるのが主たる業務の一つである。当然、授業の中で本学の建学の精神「敬神愛人」について教えるために、学校のホームページやほかの資料に載っている短編的な情報などを収集したり、聖書の「愛神愛人」（箇所）の意味を自分なりに解釈したり、「敬神愛人」の具体的な例をいくつかを紹介したりするなど自分なりに工夫してきたつもりである。しかし、自分のもっている知識の物足りなさを感じ始めた。
- ②そういう自覚とともに、建学の精神は本学の寄附行為の中に学校の設立目的に関わるものとして明記されていることを知り、その意義の重みについて気づくようになった。寄附行為について最初は単純に困っている人に必要な金品などを与える慈善行為のようなものとして理解し、学校の教育を通して社会に必要ないい人材を送り出す行為ではないかと間違えて考えたこともある。そのような意味合いも寄附行為という言葉の背後に潜んでいるかもしれないが、正しくは寄附行為というのは学校法人の設立行為とその根本規則を指す。この定義からすると、寄附行為の核心に据えられている建学の精神は学校運営や教育など学校の諸活動に根本的な精神として作用するものであることがわかる。ところが、学校における建学の精神の意義を改めて認識するようになったものの、次のような問いも自然と浮かび上がった。つまり、宗教的特徴を帯びている建学の精神が今の時代にこの日本社会において具体的にどのように役に立つ

のであろうか、チャペルやキリスト教関係の科目などを通して建学の精神が多くの方の非キリスト者の学生たちにも納得できる教育効果は何か、そして、筆者自身が建学の精神の実現に対する十分な確信をもって教育現場に臨んでいるのか、と自己反省的に自問するようになったということである。

- ③現在としては本学のキリスト教関係の教職員に対してさえ、建学の精神の意味と意義に関する体系的な教育プログラムは行われていない。そのため、建学の精神に関する教育は、教職員のそれぞれの裁量に任されており、建学の精神の実現を通して期待される具体的な教育効果もキリスト教関係の教職員の間で十分に共有されていないのが現状である。時代の変化とともに、非キリスト者の教職員・学生の割合が高くなる中、キリスト教関係の教職員がひとまず建学の精神の本来の意味に近いものを知ることはとても大事な課題であるに違いない。このような認識とともに建学の精神に関する教育プログラムの作成を急がなければならない時期に差し掛かっているのではないかと考えるようになった。
- ④筆者は、このような反省的考察を通して、現在本学において建学の精神が、学校創設者のキリスト教的精神を十分に反映しているのか、学校運営や教育活動全般に行き渡って息づいているものとして命と活力を与えているのか、学校の教職員と学生を真理のような非物質的価値に導くものとして働いているのかと問いかけるようになった。そして、大多数が非キリスト者である学生たちに合う形で建学の精神を具体的にどのように浸透させ、実現していくか、という課題についても問うようになったのである。
- ⑤これらの問いは、学校の長い歴史の中で定着されてきた建学の精神の現代的意味への関心につながった。そして、建学の精神の現代的な意味と伝統的で宗教的意味との調和をいかにして保つか、両者をいかにして相互補完していくかという関心へと導いてくれた。
- ⑥今まで述べたいいくつかの問題意識以外にも、本研究に取り組むように促したもう一つの動機がある。約2年前に本学の建学の精神に関する二つの研究会、すなわち「(学校創設者の) クライン研究会」「(初代学長の) 福田研究会」が立ち上がったが、筆者個人として行う本研究がそれらの研究会に少しでも前向きな意味で刺激を与え、参考になるような資料を提供したいという意図も、本研究の背後に潜んでいる。

本研究は本学の建学の精神における宗教的意味の根源的部分に迫ることを目的とするが、次のような方法で行うことにする。

- ①まず、明治時代本学の前身である名古屋英和学校で教師として学生指導に携わっていたころの内村鑑三が強調していた「キリスト教的兄弟愛」(Christian Brotherhood)の意味を探る。この言葉は1896年10月16日彼が名古屋からアメリカのベル宛てに送った一通の手紙の中に書かれている。まずこの手紙を分析することにする。
- ②この手紙に登場する内村の「キリスト教的兄弟愛」は、なぜ本学の建学の精神「敬神愛人」の源流といえるのか、と疑問視されるかもしれない。しかしながら、その源流である理由として三つの点が挙げられる。第一、時期は重ならなくても内村は、名古屋英和学校で勤務していた頃、その建学の精神に同意していたと推測できるからである。第二、学校創設者のクライン博

士が籍を置いていたアメリカのメソジストプロテスタント教会は、内村の信仰と受洗に影響を与えた宣教師M. C. ハリスが所属していたアメリカのメソジスト監督教会より分離した教団であるという点において、内村の「キリスト教的兄弟愛」はクライン博士の敬神愛人とともにメソジストというカテゴリーの中に入るからである。第三、クライン博士の敬神愛人と同じく、内村の「キリスト教的兄弟愛」の中身は、正統派キリスト教の世界では普遍的でスタンダードなものとして捉えられるからである。これらの理由で、内村の「キリスト教的兄弟愛」に関する本研究は本学の建学の精神の源流に辿る一つの方法になるであろう。

- ③内村が「キリスト教的兄弟愛」をいかにして自分のものとして受け入れるようになったのか、そのプロセスを辿るためには、キリスト教に入信して間もないころ、彼がいかにしてキリスト教に躓き、真空と表現される大きな心理的挫折を経験するようになったのかについて理解しなければならない。本研究の本論に当たる内村の真空の問題とその解決の過程は、1895年刊行された内村の自伝的作品“*How I became a Christian: Out of my diary*”（『内村鑑三全集3』）の中に詳細に言及されているが、本研究はこれを主たるテキストとして取り扱う。ちなみに河野純治訳（2015）と鈴木範久訳（1958）を参考にする。
- ④そして、この真空問題を解決するためにアメリカに渡った内村が、どのような出会いと出来事を通して、心境に変化が生じ、真空問題の解決に至るようになったのかも調べなければならない。これは、内村がキリスト教信仰の神髄を体得するとともに、キリスト者としての確固たるアイデンティティを確立するようになる過程を示してくれるであろう。実は彼が体得したキリスト教信仰の神髄とキリスト者としてのアイデンティティの中核に「キリスト教的兄弟愛」があるのである。
- ⑤その後、このような意義をもつ彼の「キリスト教的兄弟愛」の中身を分析し、それに照らし合わせて名古屋学院大学の建学の精神「敬神愛人」の実現において特に心がけるべきいくつかの点について論じる。
- ⑥内村が自分の回心の証拠として、そしてキリスト者のアイデンティティの証しとして吸収するようになった「キリスト教的兄弟愛」は本学の建学の精神の底辺に流れている宗教的意味に深く関わるといえる。本研究においては建学の精神の宗教的意味に焦点を当てることにし、建学の精神の現代的意味は次の研究課題にしたい。

2. 名古屋英和学校における内村鑑三の「キリスト教的兄弟愛」について

1888年（明治21）アメリカ留学から帰国した内村鑑三は、1891年（明治24）第一高等学校でのいわゆる「不敬事件」の後、1893年（明治26年）京都に転居し、本研究のメインテキストである『*How I Became a Christian*』を脱稿する。1894年（明治27）には『代表的日本人』（*Representative Men of Japan*）の元である『*Japan and the Japanese*』を刊行する。そして、1896年（明治29）35歳の時に書物出版の利点や、名古屋英和学校の第二代目の校長A. R. モルガン宣教師の要請により、名

古屋英和学校の教員として働くために当時人口20万の名古屋市に赴く⁶⁾。こうして同年9月18日、内村鑑三は牧師の養育を柱としていた名古屋英和学校神学部長に就任するようになるのである⁷⁾ (1897年2月退職⁸⁾)。内村鑑三の名古屋英和学校就任については、『扶桑新聞』や『福音新報』や『基督教新聞』など当時のいくつかの新聞に同じ内容の広告⁹⁾が載せられている¹⁰⁾。

同年10月5日、名古屋英和学校に赴任して約2週間経った頃、平岩愼保に手紙によると、全校生25人で外国人の宣教師たちのみによって運営されていた名古屋英和学校のために、内村は大きな計画をもってしたが、それがむしろ学校には迷惑をかけることを懸念して、慎むことにするとある¹¹⁾。

同年10月16日、ベル宛ての手紙を見ると、内村は名古屋英和学校の教員であるモルガン牧師、名古屋学院大学の学長レイマン、リチャドソンについて言及する中、「キリスト教証拠」(Christian Evidences)を週3時間、「倫理学」を週1時間、「地理」と「歴史」を週12時間、講義するとい

-
- 6) 『内村鑑三全集36』, 岩波書店, 1983, 449-450頁。1896年(明治29)9月4日と7日京都からアメリカのベル(Bell)宛てに送った手紙によると、内村は1週間内に京都を離れ、名古屋に行く予定であるとある。名古屋に行く目的としては、一つは名古屋は東京に近いこと、自身の書物出版において明らかに利点があること、もう一つは執筆活動とともに最近偶然知り合いになったA. R. モルガンというアメリカのメソジストプロテスタント教会の宣教師が関わっている男子学校の名古屋英和学校の教員として働く目的である。内村鑑三が名古屋英和学校での仕事を引き受けた背後には、ベル宛てのこの手紙を書く2週間前に、実はA. R. モルガンが京都の彼のところを訪ね、名古屋での仕事の件を要請したこと、そして、その出会いを通してモルガンの子供のような純粋さや率直さに魅了されたことがある。内村との出会いの後、モルガンは特使を通して二回ほど彼を説得するが、内村はその要請について真摯に熟考したうえで、それを引き受け、名古屋で執筆活動と教員生活をする決心にいたるのである。京都で厳しい経済状況の中におかれていた彼にとって、おそらく約束された毎月70円の給料もその決心につながるきっかけになったかもしれない。
- 7) 名古屋学院大学五十年史編集委員会(編)『名古屋学院大学五十年史』(2014), 8, 232頁。名古屋英和学校に神学部が開設されたのは1895(明治28)年であるという。
- 8) 藤巻孝之「内村鑑三の教育精神」『名古屋学院論叢』二, 1993, 165-166頁。藤巻孝之氏の解釈によると、早い退職には二つの理由がある。一つは、内村が名古屋英和学校の教育振興に努力し自らも楽しい日々を送ったにもかかわらず、学課の難と躰(しつけ)のきびしさのため、つまり、自分の教育に取り入れようとする原則、厳格、鍛練のため、退校する者が多かったということを悲しく感じたということである。もう一つは、当時万朝報社長黒谷涙香の懇請をうけることによって、中央文壇への展望が文筆による彼の戦意をそそり、それを摂理として感じとっていたということである。これらの事情により、しばらく躊躇したのち、ついに名古屋英和学校を去るのである。
- 9) 名古屋学院史編集委員会(編)『名古屋学院史』(1961), 47-48頁。広告の内容「▽生徒募集△一來校ハ來ル九月十四日開校、入学志願者ハ同日マデニ申込アレ。○本校ハ普通学部、神学部ニ分レ内外人教師叮嚀教授ヲ行フ。○今回更ニ農学士、米國理学士、内村鑑三氏ヲ聘シ教授上一生面ヲ開カントス。○校内寄宿舎ノ設アリ、遠來ノ学生ノタメ懇切ナル監督ヲナス。一明治二十九年八月一名古屋市南武平町、英和学校」(扶桑新聞)とある。
- 10) 鈴木範久『内村鑑三日録1892-1896後世へ残すもの』, 教文館, 1993, 8頁。
- 11) 『内村鑑三全集36』, 452頁。

うなど自分の学校教務（講義）について簡単に紹介する¹²⁾。

そのほかにも、自分が卒業したアメリカのアマスト大学の授業で学んだ経験を生かして週1回の野外教育や、礼儀教育（服装のしつけなど）にも意を注ぐ。とくに、内村は1881年（明治14）卒業した札幌農学校の魂とも呼ばれる「祈りつつ学び、感謝しつつ働く」精神を養うために、学生の生活全般を指導する。藤巻孝之氏によると、この標語が英和学校建学の精神「敬神愛人」の敷衍ないし当時の現代化であり、この標語の中に、彼の教育精神と信仰の特質をうかがえることができるという¹³⁾。つまりこの標語は実際学校で学問を通して理性を啓発し、労働を通して働くことの神聖さを教えるとともに、貧しい学生の学費を支援するという形で実践されていたため、「敬神愛人」の具現であるということである。

そして、内村が自分の蔵書を多数学校に寄贈し読書会を開いて膝を交えて生徒の指導に当たったことが端緒となって図書室が誕生するようになった、という記録¹⁴⁾からも彼の「敬神愛人」の精神は断片的に窺える。

さらに、内村鑑三が持っていた「敬神愛人」の精神がいかなるものなのかについては、1896年10月16日彼が名古屋から送ったアメリカのベル宛ての手紙の中によく表れている。

「人生は愛です。そしてこの世界を何かの宗教に造るのではなく真実のパラダイスに造るためには何がもっと必要とされるのでしょうか。……最近、「キリスト教的兄弟愛」の思想は私の頭と心から離れません。つまり、「キリスト教的兄弟愛」とは、われわれが兄弟であること、私が私自身だけのためにいかなるものも所有していないこと、われわれがクリスチャンの親交の中にあることによって私のものは彼ら（兄弟たち）のものであり彼らのものは私のものであること、私は彼らに仕われることなのです。ひいては神様の助けによって私の命を彼らのためにささげるということです。私のキリスト教的経験においてこのような思想は以前はなかったものとして非常に力強く私に押し寄せてきています。これが政治的、経済的、ほかの社会的な問題の解決になるのではないのでしょうか？ 社会主義ではなく分かち合うポケット（財布）の共産主義、それが理想的なキリスト教的ありさまではないのでしょうか？ さらに自分の兄弟に自分のすべてを捧げ

12) 同上、455頁

13) 藤巻孝之、前掲書、156-158頁；『名古屋学院史』（1961）、48-49頁。藤巻孝之氏によると、「祈りつつ学び、感謝しつつ働く」というモットーにおいて「祈りつつ学ぶ」精神は、キリスト教なしの教育と学問の危険ないし無意味を云っていることである。言い換えれば、真理の発見、学問の向上（理性の啓発）は、神の許容と祐助（ゆうじょ＝助け）がなければ不可能であり、そのため、被造物である人間は創造者である神に謙虚に祈り求めなければならないということである。この精神は札幌農学校から学んだものである（158-160頁）。そして、「感謝しつつ働く」の精神は、神を「働く者」（創造者）として理解し、人間の労働を信仰と深くかかわる神聖なものとして考えていた内村の労働観と関連付けられるという。内村は校内に小規模の農園を設け豚や兔の飼育を指導するにおいて、その実益をもったの乏しき学生を援助し、それを通して労働による独立心を涵養させようとする。藤巻孝之氏は、内村のこういう教育的狙いから「感謝しつつ働く」精神の意味を引き出す。このような「祈りつつ学ぶ」精神と「感謝しつつ働く」精神は札幌農学校から学んだものだという（160-162頁）。

14) 『名古屋学院史』（1961）、48-49頁。

る人生より何がもっと偉大でしょうか！ 私の意志、私の知性、私の体、私の命、それらは私の兄弟たちのものです。なぜならそれらすべては神様のものですから¹⁵⁾。」

ここで、内村が語っている「愛」(love)、「キリスト教的兄弟愛」(Christian Brotherhood)、「キリスト者の親交」(Christian fellowship)という言葉には、すべては神のものであるというキリスト教の信仰に基づいて自分のすべてを兄弟のためにささげるという意味が含まれている。内村は、この「キリスト教的兄弟愛」をもって教鞭をとり、学生指導に当たったのであり、この愛が、名古屋英和学校建学の精神「敬神愛人」の源流を成すと言える。ところが、このように熱く語る内村もこの愛について知らない時期もあった。キリスト教世界の中で愛を感じられないことに真空(虚しさ)を感じ、その真空の実態を知り解決するために、当時キリスト教国であるアメリカに旅立つ。そして、アメリカで「キリスト教的兄弟愛」を身をもって体験する。上記の「キリスト教的兄弟愛」に関する記述は、その当時から約8年前にアメリカ留学でキリスト教徒としてのアイデンティティ確立に決定的な影響を及ぼした一連の愛の体験に基づいているに違いない。アメリカで経験した「キリスト教的兄弟愛」とはいかなるものだったのであろうか。

本研究は、当時内村鑑三が名古屋学院で教員として働いていた際、身につけていたこの「キリスト教的兄弟愛」の実体を追跡する。そうすることによって、内村のspiritが吹き込まれていた当時の名古屋英和学校建学の精神(敬神愛人)の源流にたどり着くことを試みる。この愛は、「キリスト教的兄弟愛」の対極にある真空の実態を明らかにすることから始めなければならない。

3. “How I became a Christian: Out of my diary” における真空

“How I became a Christian: Out of my diary”, つまり『余は如何にして基督信徒となりし乎』と訳された内村のこの著書は、彼自身の日記¹⁶⁾を基にしてどのようにしてキリスト教徒になったかについて、言い換えれば、改宗において彼が経験した精神的成長の様々な段階について正直に告

15) 『内村鑑三全集36』, 456-457頁。原文「Life is Love, and What more is needed to make this globe a veritable paradise than the Religion of—...Recently, the idea of Christian Brotherhood is taking possession of my head and heart. That we are brothers, that I own nothing for myself alone, that mine are theirs and theirs are mine by the right of our Christian fellowship, that I have to serve them, and with God's help, to give my life for them—never before in my Christian experience has this idea come so powerfully upon me. Is this not the solution of all political and economical and other social problems? Not Socialism, but Communism with separate pockets,—is that not an ideal Christian state? And what more is grander than a life that gives his all to his brothers! My will, my intellect, my body, my life,—they are my brothers' because they are God's.»

16) “How I became a Christian: Out of my diary” 『内村鑑三全集3』, 岩波書店, 1982, 7頁。内村はこの日記を「航海日誌(logbook)」と呼んでいる。というのは、みすばらしい帆船(poor bark)のような自分が罪と涙と多くの苦悩を経て天上の国に向かって進む日々の過程を記録したものだからである。次の資料も参考せよ。河野純治訳『ぼくはいかにしてキリスト教徒になったか』(光文社, 2015), 13-14頁と17-18頁。

白したものである。

この本は全体的に見ると、彼の誕生と育ち、札幌農学校での生活と入信、札幌農学校卒業後の独立教会設立の過程と信仰的葛藤（「真空」の経験）、アメリカでの留学生活と内面変化の過程、そして帰国と本の総括というふうに時系列的構成を成している。

3.1. 真空を自覚するまで

1861年3月23日武士階級に属する家系に生まれた内村鑑三は、両親や祖父母の下で素朴な人性と武士道的・儒教的倫理の素養を培う。そして、神道から神を畏れ敬う宗教心を学ぶが、行き過ぎた神への畏怖の念とそれによる宗教的義務に縛られていた臆病な子供の時代を送る¹⁷⁾。

このような倫理的宗教的背景をもっていた内村鑑三は、1878年16歳の時、官立大学「札幌農学校」の第2期生として入学する。当時、初代教頭のウィリアム・スミス・クラーク（1826～86）博士の活動によって、第1期生の学生は全員キリスト教に入信する。内村はこの第1期生の先輩たちによる入信の勧誘に耐えられない苦痛を覚え、彼らに強く抵抗することもあった。しかしながら、抵抗しきれず、1877年12月1日、30人以上の先輩、同期生とともに、その前の年にクラーク博士が英語で作った「イエスを信じる者の誓約」(covenant of believers in Jesus) にサインさせられる。これは自分の意志と良心に反するものとして周りの強要によって誓約してしまったということである¹⁸⁾。この出来事の後、不思議なことに、内村は多神教的迷信からキリスト教の一神論へ、すなわち宗教的束縛の重荷を負っていた臆病な少年から精神の自由をもって陽気に笑える明るい少年へと生まれ変わるのである。こうしてキリスト教の中で精神の自由を経験した内村は、学生主体の礼拝・祈祷会に参加しはじめる。1878年6月2日（日）には、同級生の新渡戸稲造を含む6人の学生とともに、アメリカメソジスト監督教会の宣教師メリマン・コルバート・ハリス（1846-1921）から洗礼を受け、イエスキリストに忠誠を誓う。そして、当時洗礼を受けた学生たち¹⁹⁾とともに、内村はキリスト教の布教者（宣教師）へ生まれ変わり、教会組織づくりに励んでいく²⁰⁾。2年生となった内村は、一緒に洗礼を受けた6人の同級生と意気投合して、寮の各

17) 同上、7-13頁。

18) 内村は改宗に対して抵抗しながらも誓約書のサインした背景に、愛国心の実現などの意図が潜んでいたことが窺える。つまり、キリスト教という新たな信仰を彼が受け入れたのは、本来の霊的価値のためではなく、幸せな家庭、独立した政府（free governments）などのように実用的な目的のためであり、彼がキリスト教を歓迎したのは、「わが国をヨーロッパやアメリカのような強い国につくるために」という計画（彼の人生の第一の目的でもあるもの）を実行する巨大なエンジンとしてのキリスト教を考えたからであるということである。（同上、101頁。）

19) 河野純治訳『ぼくはいかにしてキリスト教徒になったか』（光文社、2015）45-47頁の注を参照せよ。内村と一緒に洗礼を受けた6名の同級生のあだ名、名前、そして洗礼名（Christian name）は次の通りである。内村鑑三（ヨナタン）、Ot（太田（のち新渡戸）稲造、パウロ）、M（宮部金吾、フランシス）、A（足立元太郎、エドウィン）、H（広井勇、チャールズ）、T（高木玉太郎、フレデリック）、F（藤田九三郎、ヒュー）

20) “How I became a Christian: Out of my diary”（『内村鑑三全集3』）、13-21頁。

自の部屋を小さな教会²¹⁾とし毎週日曜礼拝を行う。3年生は3年生で宗教的集会をもつ。日曜日の晩には上級生たちと合同で聖書勉強会を開く²²⁾。同年12月1日、この小さな教会のメンバーたちは、自分たちに洗礼を授けたハリス宣教師を信頼し、特に深く考えることなく彼を通してメソジスト監督教会(The Methodist Episcopal Church)に入会する²³⁾。

翌年の1879年夏休み中首都にある実家で過ごしていた内村は、家族の改宗に全精力を注ぐ一方、たくさんのキリスト教徒と出会い、いくつかの教会を見る機会を通して、学校卒業後の自分たちの教会(礼拝堂)を持つことを希望し、夢見る²⁴⁾。1880年3月28日、内村と6人の同級生は、7月頃卒業する上級生8人のキリスト教徒とともに、近い将来、福音を伝えるために実際礼拝堂を立てることについて話し合う²⁵⁾。そして早くも1881年1月9日新しい教会の建設のための委員が任命される。ところが、大きな借金への負担を恐れ新築は断念し²⁶⁾、その代わりに古い物件の家を探し始める²⁷⁾。礼拝堂購入資金調達などの困難を経験する中、内村と教会のメンバーたちは、外国の教会支援に頼らない自立した教会づくり、つまり教会の独立について話を深めていく。その結果、同年5月ごろ教会の独立へと意見がまとめられ、メソジスト監督教会に脱退を告げようになる²⁸⁾。そうこうしているうちに、内村と同級生たちの学校生活は終わりに近づき、同年7月9日(土)卒業式を迎える。卒業とともに内村と彼の同級生たちの学校での集会(教会)は解散することになる²⁹⁾。

卒業後、国の物的資源開発の仕事に携わっていた内村は、しばらく首都にある実家に戻り、家族と親族の伝道に励む。同年秋教会活動のために、弟をつれて札幌に戻る³⁰⁾。内村と彼の弟は他の5人の同級生のキリスト教徒とともに一軒の家で共同生活をする。そのなか、札幌農学校出身の先輩たちの協力の下、木造建ての小さな新しい礼拝所を見つけ、1882年1月8日献堂式を行う³¹⁾。その後、聖公会から脱会した別のメンバーたちの協力で、同年12月頃、外国のキリスト教派からの支援金(借金として認識)をすべて返すことによって、経済的にも体制的にも外国のキリスト教派に頼らない一つの独立土着教会(Independent Native Church)を設立するに至るので

21) 同上、24頁。小さな教会の礼拝(2年生の日曜礼拝)は、完全に民主主義的でリーダー(牧師役)は順番に回ってくる。日曜日の礼拝時間になると、リーダーは、礼拝堂になる自分の部屋にメンバーたちを呼び集め、祈りをもって礼拝を開始する。そして、聖書の一カ所を読む。その次はリーダーの短いトークと、会員の一人一人のトークが続くという類いであった。

22) 同上、24頁。

23) 同上、27頁。

24) 同上、32-33頁。

25) 同上、38-39頁。

26) 同上、42-43頁。

27) 同上、46頁。

28) 同上、47頁。

29) 同上、49頁。

30) 同上、51-53頁。キリスト教に対して最大の反対者であった彼の父親の改宗をきっかけに、いとこ、おじ、弟たち、母親、妹と、家族・親族のみながキリスト教に改宗する。

31) 同上、54、60頁。

ある³²⁾。内村は教会の独立と同時に、教会に別れを告げる。それから13年後その教会は250人に成長し、当時全国で唯一の独立した教会として、財政的側面のみならず、教会的・神学的側面においても責任をもってキリスト教活動を続け、この上ない喜ばしい結果を残すようになったと内村は証言する³³⁾。

一方、内村が札幌のこの独立土着教会を離れる前のことであるが、この教会の代表として1883年5月8日から12日まで首都のある長老教会で開かれた第三回キリスト教徒大会に参加する。この大会には聖霊体験のような神秘的なものがあり、教会は復興（リバイバル）し、愛と一致の精神がとて強化されるなどすべての参加者に有益で素晴らしい効果をもたらされる。こうしていわゆるリバイバル（信仰覚醒運動）が首都の教会で始まったのである。これは内村にとってはじめて見る光景であったが、多少狂気に見えるものであった。彼自身も、聖霊の体験とされる神秘的な歓喜を経験したいという希望をもって経験者たちのやり方をまねて三日間声をあげ、胸を叩きながら強く求めたことがある。しかし、希望と喜びの神秘体験というリバイバルはなく、彼はつい失望してしまう。毎日、毎週、知り合いと友人の中で信じる者が増えるにつれて、彼の信仰心は急速に感傷主義³⁴⁾（sentimentalism）に傾いていく³⁵⁾。しかし、翌年1884年3月14日の日記によると、アダムの皮を脱ぎ捨てることはできなかった彼は、他の五感の快樂のようなキリスト教の感傷主義に幻滅を覚える。その代わりに、実践的愛（practical charity）こそキリスト教の本質であると気づきはじめる。そして、その実践的愛に生きる自分の未来の姿を想像する³⁶⁾。ところが、当時すでにできてしまった彼の魂の真空（vacuum）はとうてい埋められず、感傷的キリスト教によって真空は以前より大きく、明確になってくる³⁷⁾。彼はこの真空の問題を解決し平安と喜びを見つけ出すために、そして、キリスト教の本質である実践的愛を理解するために、さらに、一人前の男として国に貢献できるエリート（愛国者）になるために、キリスト教国アメリカへ行くことにする³⁸⁾。

内村は、1884年11月24日にキリスト教国アメリカに着く。ところが期待とは違って、そこで資本主義的・拝金主義的社会雰囲気や、白人以外の人種に対する人種差別的状況など、渡米前に聞いていた噂以上にキリスト教国らしくない様々なひどい光景を目にする。これがキリスト教国の第一印象だったのである。そのような闇の世界を目のあたりして、追い求めてきた平安と安らぎはキリスト教国では最も見つけられないもののように見える³⁹⁾。そして、キリスト教に騙されて、平安でない新しい信仰（キリスト教）のため、平安である古い信仰（神道）を諦めたことを

32) 同上、55-64頁。

33) 同上、66-67頁。

34) 感情を理性や意志よりも重んじる傾向のことを指す。

35) “How I became a Christian: Out of my diary”（『内村鑑三全集3』）、70-71頁。

36) 同上、73-74頁。

37) 同上、76頁。

38) 同上、76-78頁。内村の実践的愛は神への愛のみならず、国への愛、先祖への愛をも含む。

39) 同上、89頁。

嘆きながら、以前平安を手に入れて異教徒のまま亡くなった祖母の偶像崇拜と迷信的行為を憐れみ、祈っていた自分の無知を恥じる。そのような反省から、欧米の宗教という外的で見せかけの証拠の上に自分の信仰を築いてきたことを後悔しつつ、魂不滅の信仰を支えるより確実で深い宗教的土台を求めようとするのである⁴⁰⁾。

3.2. 真空の正体

日本から離れ、アメリカでキリスト教の本質を知ろうとする探究の旅へ彼を駆り立てた真空の正体とは一体何だろうか。この本の第5章で初めて出てくるこの真空 (vacuum) という言葉は、empty space, emptiness, emptyという言葉としても表現されている。またはdesertのような空間やspaceになぞらえられる。これらの言葉に即すると、真空は全くなにもない状態や空間であり、命や温かさを感じられない精神的な虚しさや空虚さなどが想像させられる。内村の日記をよく見ると、このような真空は、宗教活動や科学実験の成功などいかなる人間的営みによっても埋められず、超自然的何かによってはじめて満たされうるということが暗示されている。彼自身も自分の内面にできた真空の存在について認識はするようになったものの、その原因や正体について不明であると告白している。ただ彼にとって確かなことは、真空によって幸福感と満足感を消失したということと、その解決に全力で挑まなければならないということだったのである⁴¹⁾。

このような真空はなぜできたのであろうか。真空の発生過程を究明しながら、その正体に迫ってみたい。

- ①まず、精神的虚しさ、虚無さと理解される真空の原因を理解するために、内村の価値観において特に重要な徳目を理解する必要がある。内村は洗礼を受け、自分の洗礼名を旧約聖書サウル王の息子ヨナタンと名乗る。その名を選んだ理由は、ヨナタンのダビデに対する愛がとても気に入っていたため、そして、彼自身が友情の美德 (the virtue of friendship) の強い擁護者だったためだという⁴²⁾。このように、内村の価値観において愛や友情という徳目が欠かせない大事な部分を占めていたことがわかる。
- ②愛と友情を何より重んじる彼の価値観は、教会は血縁より親密な愛の共同体でなければならないという彼の教会観にも表れる。1879年夏休み中首都にある実家で過ごしていた内村は、「兄弟姉妹」と呼んでいた多くのキリスト教徒と出会う。その出会いを通して、内村は、キリスト教徒の交わりは、異教徒とまったく異なる集まりであり、キリストの仲間・弟子 (fellow-disciples) は実の兄弟よりもっと互いに親密につながらなければならないと信じるようになる。ひいては自分たちの小さい集会も含め、キリスト教会全体についてもそれは同じであるべきだという強い確信に至る。そして、内村は自分が正しいと考えるそういう確信と信念に促されて自分たちの教会を建てることにするのである⁴³⁾。上記で言及したよう

40) 同上, 90頁。

41) 同上, 67頁。

42) 同上, 20頁。

43) 同上, 32-33頁。

に、内面の真空に気づき、苦しんでいたときさえ、キリスト教の本質は実践的愛（practical charity）と語り、その実践的愛に生きる自分の姿を夢見ることができたのも、愛と友情を最も高い徳目として重んじる彼の価値観と無関係だといえないであろう。

- ③ところが、愛と友情に反する教会の行いとキリスト教徒の行いを直に経験することによって内村は次第に失望するようになる。例えば、1880年10月17日、ある家庭集会で6人が洗礼を受けたが、愛の交わりであるべきあの狭い空間において一方は聖公会、他方はメソジストというふうに二つ教派の分離が明白に存在し、内村はそれを教派分離主義の悪弊（the evils of denominationalism）として感じたことがある⁴⁴⁾。
- ④特に、真空の発生に決定的な要因とされる出来事は、同じキリスト教徒でありながらも同じ教派でない者はよそ者として扱う愛のないキリスト教会の行いであった。この出来事は、札幌農学校在学中内村らに洗礼を授けたハリス牧師の後任であるD牧師との出会いから始まる⁴⁵⁾。1881年3月8日、内村らが新しい教会建設を決定した後、D牧師の手紙を通して、ハリス牧師の紹介で入会していたアメリカのメソジスト監督教会から礼拝堂建築資金として返済しなくてもいい支援金400ドルの約束を受ける。内村らはそれを借りつもりで承諾する⁴⁶⁾。その後内村らはメソジスト監督教会を脱会しどこの教団にも属さない独立教会の設立に合意する。そして、D牧師にその旨を伝え、D牧師は喜ばない反応を示す⁴⁷⁾。1882年1月1日、外国のキリスト教派に頼らない独立したネイティブ教会を設立することになった頃、D牧師の手紙が届く。その内容とは、教派から脱会する内村らの計画を認めないということ、内村らの経済的困難を知っているはずなのに支援金400ドルの一部でも返すことを求めるということであった。内村の日記を見ると、D牧師の手紙の文面からは自分たちの教会設立の純粋な動機に対して真実に同情する気持ちが少しも感じられないと語りながら込み上げてくる感情を抑えている彼の姿が思い描かれる。その支援金をすぐにでも返済しようとした当時の彼と彼の仲間たちの反応を見ても、愛と友情のない教会の対応に対して怒りに滲んだ彼らの感情を読み取ることができる⁴⁸⁾。内村らは数日後（同年1月6日に）支援金の半分に当たる200ドルを返し⁴⁹⁾、残りは同年12月に返済する⁵⁰⁾。このように内村は自分たちが一時期属していた外国の教派から脱会したとき、友愛のない冷たい排他的な扱いを受けたという経験を通して、キリストに従って愛と友愛の教会共同体を作ろうとしていた若き内村は傷つけられてしまったのであろう。この傷こそが真空の正体だと考えられる。愛と友愛がキリスト教の本質とキリスト教徒としてのアイデンティティに関わる以上、内村にとって、その

44) 同上、40頁。

45) 同上、39頁。

46) 同上、42頁。

47) 同上、47頁。

48) 同上、59頁。

49) 同上、60頁。

50) 同上、64頁。

傷はキリスト教の本質とキリスト教徒としてのアイデンティティを自分の魂から根こそぎ切り離してしまうようなものだったに違いない。排他的教派分離主義という愛と友情の無さから、キリスト教の本質とキリスト教徒としてのアイデンティティの無さを経験したことを想定すると、なぜ内村が真空という言葉を選んだのか、納得がいくのではなからうか。

- ⑤真空という魂の傷は、上記で紹介したように、1883年5月頃あるキリスト教大会を通して経験した、五感の快樂のようなキリスト教の感傷主義によって、より大きくなり、内村は真空の存在を明確に認識するようになる。そして、この感傷主義に幻滅を覚える中で、内村は、実践的愛 (practical charity)こそキリスト教の本質であると気づきはじめる。真空という内面の傷、あるいは人為的な手段によってはとても埋められない暗い深淵のただ中で、実践的愛というキリスト教の本質の光を求め、その光に向かって旅立とうとするのである。
- ⑥真空問題を解決するために、1884年キリスト教国アメリカにたどり着いた内村は、愛や友情とは無関係なキリスト教国社会の暗い側面(拝金主義や人権差別など)を目のあたりにする。その際、日本で愛と友情の無さとして経験された真空は、自分の内面の淵として描写される。真空と感じていたものは、知ってみれば、実は、キリスト教信仰から学んだ恐れ、罪、疑問など愛とは無関係な要素によって簡単にも投げ落とされた底知れぬ淵 (abyss) であったのである⁵¹⁾。ところが、この内面の淵に実践的愛の光が徐々に差し込んでくるようになる。そして、「神は愛である」という聖書の言葉を、身をもって体験し、真空の問題が解決されていくのである。
- ⑦内村は自分の魂の真空の問題について明確に認識していたそのころ、再婚相手を求める抑えがたい欲求とそれによるやつれと虚しさや、不健康になっていたことや、休息と楽な仕事を求めていたことなどが、真空の問題に関わっているように、述べられている⁵²⁾。しかし、それらは真空の原因や正体に関わる核心的な要素だといえない。妻の死に対する悲しみ⁵³⁾や、再婚相手との破婚という辛い経験や、過去の罪を深く悔い改めたり自分の努力ではとうてい自分を救えないと感じたりする経験⁵⁴⁾も、真空形成に何らかの形で関わっているかもしれないが、真空に関わる核心要素であるかは不明である。
- ⑧内村の罪意識、予定論のようなキリスト教教義への失望や感傷主義への傾倒などを真空発生の原因と見る藤巻孝之氏の解釈⁵⁵⁾や、外国の教会と外国人宣教師とのつながりの断絶による

51) 同上、90頁。

52) 同上、67頁。

53) 同上、53頁。明治1889年彼女と結婚するが1891年に死去する。

54) 同上、68頁。

55) 藤巻孝之「内村鑑三の教育精神」『名古屋学院論叢』二、1993、103-110頁。札幌農学校卒業から渡米までの約3年間、自分の罪に対して強く自覚していたことや、キリスト教の教義(天国と地獄の振り分け、予定説)について苦しんでいたことや、札幌の独立教会を設立し、充実した教会活動にもかかわらず、平安を感じなかったことや、キリスト教の感傷主義に傾き失望したことや、破婚(1884年3月結婚・同年10月離婚)によって罪意識が倍加させられ、魂の傷がもっと深められてしまったことなどが、真空の

内実（キリスト教信仰）の無さを直観的に覚知したものを真空として理解する橋爪大三郎氏の見解⁵⁶⁾も、真空理解において欠かせないものであろう。

- ⑨しかしながら、真空発生の原因と真空の正体において核心的なものは、キリスト教の本質とキリスト教徒のアイデンティティに関わる愛と友愛のない排他的教派分離主義の闇を経験したということ、そして、その経験を通して、キリスト教徒として生きる意味と目的である愛と友愛の共同体づくりに疑問ができその疑問に躓いたことによって真空という魂の傷ができてしまったということ、また、その真空が一時期感傷的キリスト教に頼ることで内面の闇としてより大きく見えてくるようになったということ、さらには、キリスト教国アメリカで、愛と友愛と全く関係のない社会的雰囲気を通して、その真空が底なしの深淵というより複雑で解決困難な実体として意識の前面にその姿を現すようになったということである。要するに、内村の真空は、特に愛と友愛を全く感じられなかった一連の経験によって生じ、明確になったものだといえるのである。

4. “How I became a Christian: Out of my diary” における真空問題の解決

ここからは内村が自分の真空問題を解決していく過程において重要な実践的愛の出来事について述べることにしよう。

4.1. 真空解決の過程Ⅰ：ペンシルヴェニアにて

①友愛の精神を学ぶ

内村は失望をもたらした異国の地で味わう孤独の中で、自分と語り合い、自分を顧みながら、日本人としての自覚とプライドをもち、故郷への特別な思いにふける。その一方、真空の体験によってキリスト教に完全に躓くことはなく、祈りの中で神と対話し神を求めようとする⁵⁷⁾。特に完全な自己犠牲と全くの無私精神である慈善活動（philanthropy）を通して、自分の肉欲と利己心という罪深いものから内面の清らかさの状態に至り、裁きを避け神の国を受け継ごうとする。慈善活動への学びは、アメリカに到着してまもない頃、ペンシルヴェニア州の最も実践的な慈善

原因と背景として理解する。藤巻氏の解釈には愛と友愛の無い経験に関する内容は指摘されていない。

56) 内村鑑三著・河野純治訳『ぼくはいかにしてキリスト教徒になったか』、光文社文庫、2015、354-355頁（橋爪大三郎解説）。内村と彼の友人たちはメソジストや聖公会といった外国の教会やその宣教師たちに頼らない独立土着教会を設立する際、内村は外国の教会や宣教師たちから教義や神学が提供されなくなることによって、イエスキリストを信じる者という内実のなさ、キリスト信仰という内実の無さを直観的に覚知するようになる。橋爪氏はその直感的に覚知したものを真空として、あるいは内村を外国へと駆り立てた理由のわからない衝動として理解する。この見解には愛と友愛の無い経験について言及されていない。

57) “How I became a Christian: Out of my diary”（『内村鑑三全集3』）、92-94頁。

家 (philanthropist) のある医師⁵⁸⁾ との出会いを通して実現される。内村はその医師が院長として勤めていた知的障害児施設で看護人としてしばらく働くようになるが、自分の利己心に苦しみ身悶えながら安らぎを求めていく⁵⁹⁾。

医師とその夫人は教派のことは一切問わず純粋に内村の健康と幸福を願い物質的な面で支援を惜しまなかった。彼らから内村は、人格的な友愛の精神を学び、慈善活動に必要な鉄の意志に基づいた知性の大切さに気付く。このように彼の下で慈善活動と友愛の精神という実践的なものを学ぶことによって、自分が苦しんでいたあの病的な信仰心の状態から救われるようになり、神の導きの中で冷たく硬く非実践的なキリスト教を超え、人間らしさを形作られるようになるのである⁶⁰⁾。

②宗教的寛大さを学ぶ

内村の真空解決の過程において、もう一つの重要なポイントがある。それは内村がユニテリアンといういわゆる異端派の信徒であるその医師夫婦の、正統派の信徒である自分への友愛を通して、宗教的寛大さ (liberality) も学んだということである。彼にとって、真の寛大さとは、自分自身の信仰への怯まない確信に立っていながら、すべての正直な信念に対しては慎み、許すことである。彼は、何らかの真理を知ることができるという個人的信念 (belief) と、すべての真理を知ることにはできないという個人的疑念 (disbelief) との共存が、キリスト教における真の寛容さの基礎であると認識し、この寛大さこそ、すべての善意とすべての人びととの平和的關係とすべての善の源であると強調する⁶¹⁾。

③宗教的体験へ導かれる

内村は、キリスト教国アメリカで、宗派にとらわれることによるキリスト教徒たちとの不和や宗教的敵意の問題と、宗派にとらわれない寛大さについて理解を深めていく。その中で、1885年4月5日復活祭の日曜日、生まれて初めて天国と不滅について大きな悟りを得、計り知れない喜びを経験する⁶²⁾。医師夫婦の友愛 (慈善) と宗教的寛大さに基づいたこの宗教的な喜びの経験は彼にとって、日本で友愛のない冷たい教派主義や感傷主義から傷つけられてできた真空の闇から抜け出し、キリスト教の真理により近づく第一歩になったのではないかと考えられる。

ところが、人を愛する事業としての慈善活動は、まだ自己を愛する傾向が完全に消えない当時の若い内村には負担になる仕事で、自分の魂の問題解決につながらないことに気づく。それで彼は施設での仕事を辞め、より確かなものを求め、ニューイングランドに赴く⁶³⁾。

58) 内村鑑三著・河野純治訳、前掲書、頁195頁、注9を参照。この医師の名前はアイザック・ニュートン・カーリン (1834-93) である。

59) “How I became a Christian: Out of my diary” (『内村鑑三全集3』), 94-95頁。

60) 同上、95-97頁。

61) 同上、98頁。

62) 同上、105頁。

63) 同上、109頁。

4.2. 真空解決の過程Ⅱ：ニューイングランドにて

①学長との出会いによって信仰の確信をもつ

内村はニューイングランドにあるキリスト教主義アマスト大学の学長シーリーによって入学が許可され、無料で寄宿舎の一室で生活するようになる。大学の生活が始まったときから、内村のキリスト教は全く新しい方向へ進む⁶⁴。というのは、キリスト教徒だった学長の慈善的支援や優しい人格や敬虔な信仰の影響で彼は大きく変わっていくからである。内村は、この学長ほど自分の人生に影響を与え、自分を変えた人はいないと断言するほどだった⁶⁵。学長の下で学ぶようになってから、自身への悪の力が弱まり始め、徐々に様々な罪から清められるようになる。大学での生活が2年ほど経つ頃は、相変わらず躓きやすい弱い信仰にもかかわらず、イエスキリストを通して慈愛深い神が自分の罪を贖い、自分は神の永遠の愛から引き離されておらず、神の国の途上にいると確信するに至る⁶⁶。こういう信仰的確信の中で、内村は祖国のいたるところに教会やキリスト教主義大学が建てられる未来を思い描く⁶⁷。

②信仰の確信によって癒される

これらの信仰の確信は真空という魂の傷を少しずつ癒していく。その証しとして、次のような内面の変化が見られる。内村は自分を愛し十字架にかけられたイエスを通して罪に対して死に、罪の征服者になるという教えに非常に元気づけられる。また、イエスの十字架を通して現れた神の恵みを知ることによってそれまで怖がっていた雷などあらゆる種類の恐怖が彼の心から取り除かれるような経験をする⁶⁸。さらに、自分が神に選ばれた者の一人であり、イエスに属することを信じることによって寂しさの中でも友愛のないところでも罪深さの中でも喜びを感じる⁶⁹。ひいては、自分が神に捧げられた魂であるため、神が今すぐ自分の命を奪い去るとしても自分は喜び、神の栄光においてのみ喜ぶと語るのである⁷⁰。

③信仰の確信は回心の内的証拠である神の臨在による

このような内村の信仰の確信は、いわば回心と救済への確信にほかならない。そして、彼にとって回心と救済の確信をもたらす内的証拠というのは、神の臨在を現す神の霊に触れられることによって得られるものである。内村はこの教義を知りとても慰められるが⁷¹、実際回心した

64) 同上, 111頁。

65) 同上, 113頁。

66) 同上, 114頁。彼の信仰的確信に関する表現についてもう少し例を挙げると、自分が罪の赦された神の子であること、自分の義務はイエスを信じること、神の栄光のために自分が神に遣わされること、神ご自身のためなら自分が求めるすべてが与えられること、最終的には天国での究極的な救済に与ること、世界をパラダイスにするのに必要な唯一のものはイエスキリストの宗教だと断言することなど、キリスト教信仰に対して強い確信を持つようになるのである(同上, 117-119頁)。

67) 同上, 118-119頁。

68) 同上, 121頁。

69) 同上, 119, 121頁。

70) 同上, 130頁。

71) 同上, 120頁。

ところはアメリカの大学においてだと述べる。「ぼくは故国で洗礼を受けてから約10年後、そこで（ニューイングランドの大学で）真に回心した、つまり（神に）向きを変えられたと信じている⁷²⁾」。回心を通して神の霊に触れられる体験の意義を身をもって知ようになった内村は、キリスト者の祈りは聖霊との一体の中の交わり（a communion with the Eternal Spirit）であると強調するのである⁷³⁾。

④神の臨在によって神を所有する

ところが、彼にとって、神の臨在は神との合一というキリスト教的神秘主義体験のようなものである。彼は1887年4月15日の朝、次のような祈りをささげる。「私がすでに贖われ、清められ、愛しているからあなたの元に来るのではありません。私があなたの元に来るのは、あなたに満たされることができるためであり、そして、あなたに満たされることによって、あなたにもっとありのままの姿で祈り、世界をもっと愛し、あなたの御言葉と真理の中でもっと導かれることができるためです。すべての善と慈悲と愛の源であるあなた自身を食し(to feed on Thee), 所有する(to possess Thee) ことをあなたは私に求めておられます。……⁷⁴⁾」この箇所において、自分が神に満たされ、神が自分に食され所有されるという表現は、アウグスティヌスの観想というキリスト教的神秘主義を思わせるものであるが⁷⁵⁾、内村は神の臨在の中でそのような神秘体験をしたことを祈りにおいてほめかすのである。この祈りから、彼をアメリカ留学へと掻き立てた真空が、回心や救済の内的証拠としての神の臨在によって埋められ満たされつつあったと推測できるのではないだろうか。神の臨在は彼の真空を満たすだけでなく、さらに彼の内面を超えて周りの世界をも満たしていくものとして描かれる⁷⁶⁾。

⑤神の臨在は人を通して現れる

回心や救済の内的証拠として理解される聖霊の臨在は、彼にとって、慈善を惜しまない信仰者や慈善活動を手段として現れる。特に内村は学長を通して神の存在を知ようになったと告白する⁷⁷⁾。「主はそこで（大学で）特に一人の男（学長）を通して私にご自身を現してくださったので

72) 同上, 128-129頁。

73) 同上, 128頁。

74) 同上, 127-128頁。

75) アウグスティヌス著『告白録』第7巻10章16節

76) “How I became a Christian: Out of my diary” (『内村鑑三全集3』), 130頁。その例として、二か月間の夏休み中、寄宿舎に一人残って孤独な時間を過ごしていたとき、彼は、自分の中に臨在し続ける神の霊(constant presence of God’s Spirit with me)との交わりのため、学校の丘全体を神の家のように感じるが、それが人生最高の時だったという。

77) 内村が慈善を惜しまない信仰者である学長を通して神の存在を知ようになったということは、彼にとって神の臨在は感傷主義ではなく、信仰に基づいた慈善と密接に関わっていることを意味する。学長が内村に対して行った慈善には、例えば、特別に入学が許され、無料で寄宿舎生活が可能になったことや、学費など経済的な面で支援を受けたことや、特別編入の形で入学したため学位を受ける資格のないのに学位が授与されたことなど、寛大に惜しみなく待遇されたことである (“How I became a Christian: Out of my diary” (『内村鑑三全集3』), 129-131頁。)

す⁷⁸⁾」(The Lord revealed Himself to me there, especially through that one man)。

⑥神の臨在の核心であるイエスキリストによって真空は満たされる

内村は、本書の最後のところで真空問題の解決が神の恵み、導き、臨在などによると言及する中⁷⁹⁾、自分の真空が満たされることは、アメリカで祈り求めていたことであり、ついにそれを手に入れたという⁸⁰⁾。そして、自分の真空を満たしてくれたもの、すなわち祈り求めて手に入れたものは、十字架につけられたイエスキリスト(Iコリント1:23)であり、内村はこのイエスキリストこそが、彼の両親と故国の人たちへの贈り物であり、人間の魂の希望と国々の命であると強調するのである⁸¹⁾。

⑦イエスキリストへの信仰は確かな根拠に基づいている

イエスキリストが故国の人たちを含むすべての人たちに希望と命になるという確信は、アメリカで真空問題の解決を身をもって経験したことから得たものである。その確信はさらに、アメリカでその社会と歴史を学ぶ中で社会や国におけるキリスト教信仰の実際的・実践的側面を知ることを通して培ったものである。内村によるとキリスト教信仰の実際的で実践的な側面には二つがある。一つは善を行う力であり、もう一つは悪を制御する力である。

【善を行う力】

内村にとって、神の子の贖いの恵みによる罪からの解放、これこそキリスト教であり、キリスト教の神髄である。このようなキリスト教は善を示すだけでなく、人間を永遠なる善そのもの(神に)にまっすぐ導くことによって人間を善(善人)に作り替える。これはキリスト教が、律法、すなわち倫理・道徳を守らせるエンジンのような命を所有している実践的宗教であることを意味する⁸²⁾。そのため、こういうキリスト教を信じる国には、善(goodness)のために善意を愛し、善を行うことに熱心な善人(good men)と呼ばれる人が広く散らばっているという。彼らは自分たちの努力と祈りでこの世界を少しでもよりよくするために奮闘し、場合によっては国が危機に直面した際は真っ先に自分たちの命を捧げる。内村はそのような善人たちをキリスト教国で見なかったと語る⁸³⁾。

さらに、善を行う力は、慈善を広める宣教の精神からも説明できる。内村は、広がりやすい慈善(philanthropy)がキリスト教そのものだと語るデイヴィッド・リヴィングストン(David Livingstone, 1813-1873)の言葉を引用しながら、このような宣教の精神がイエスの精神であり

78) 同上, 129頁。

79) 同上, 162頁。「神の恵みは人生の悲しい経験によって生じたすべての真空(vacancies)を満たしてくれる。私は神によって自分の人生が導かれてきたことを知っている。故郷へ向かう私は恐れ、震えているが、これからも神は私にご自分をもっと現わしてくださるから、いかなる災いも恐れることはない。」

80) 同上, 163頁。「(ヤコブが祝福を受けたように)神の貧しい僕である私もキリスト教国で私が追い求め、祈り求めていたすべてを手に入れた。……私は自分が得たいと思うものを手に入れた。」

81) 同上, 163-164頁。

82) 同上, 147-148頁。

83) 同上, 152頁。

キリスト教の真の精神でありキリスト教の存在理由であると強調する⁸⁴⁾。一方、慈善と切り離されない宣教において、異教徒を可哀そうな同情の対象としてではなく自分と密接につながっている兄弟のように扱わなければならないことがキリスト教宣教の真の哲学であるという⁸⁵⁾。

【悪を制御する力】

善を行う力があるからといって、キリスト教国が悪から離れているわけではない。むしろ異教徒より非倫理的な部分もある。しかし、気性の荒いサクソン人、海賊的なスカンジナビア人、快楽的なフランス人などヨーロッパ人のキリスト教から見えるように、イエスキリストの教えによってこの世で自分を律し、社会の諸悪に対抗し、戦うことも事実だと内村は強調する⁸⁶⁾。そして、彼はキリスト教国では悪や悪人に対して善人の正義と国民の良心という力が大いに働くという特徴についても触れる⁸⁷⁾。また、キリスト教は、悪が悪としてより鮮明に見えてくるようにし、そうすることによって、何が罪であるかを確信させ、その上に立ちそれを支配するように手助けし、ひいては悪魔に対して敵意を持たせる機能をするという。これらの側面が異教徒の世界にもキリスト教が必要な理由であると彼は強調するのである⁸⁸⁾。

⑧慈善と友愛を通してキリスト教の原点に戻る

善を行い悪を制御するキリスト教の実際的な側面から、キリスト教の真理と宣教の根拠を見つけ出すようになった内村は、教義化され飾られたキリスト教ではなく、純粹で単純なキリスト教の確立を訴える。彼にとって、このような偽りのないキリスト教が、決して言葉では定義できない真理である。この真理は守ることによってのみ知られるようになり、その教えはそれを守る人自身に一致させればさせるほどより大きな意味になってくる⁸⁹⁾。それゆえに、キリスト教は慈善や友愛を通してキリスト真理を伝えるべきであり、友愛のない感傷主義や教義化された教派主義に陥ってはいけけないのである。内村によると、キリスト教がこのような原点に戻ることによって、異教徒の国々に対する神の摂理を認め、道徳を教える異教信仰の意義とその良さを認識し、異教徒に敬意を払う謙遜なキリスト教になるという⁹⁰⁾。

⑨このように慈善や友愛を通してキリスト真理を伝え、慈善と友愛のない感傷主義や教義化された教派主義を捨て、兄弟愛をもって異教徒との謙遜な関係を築いていくということがキリスト教の本来の姿である。このようなキリスト教の本来の姿を正しく理解し、彼の内面に取り戻すのが真空問題の解決の過程であり、キリスト者としてのアイデンティティ確立の過程なのである。

84) 同上、156頁。

85) 同上、157-158頁。

86) 同上、149頁。

87) 同上、153頁。

88) 同上、161-162頁。

89) 同上、145-147頁。

90) 同上、144、146-147、157-158頁。

5. 内村の真空と「キリスト教的兄弟愛」

5.1. 真空から「キリスト教的兄弟愛」へ

今まで名古屋英和学校で内村が教育者としてもっていた「キリスト教的兄弟愛」、その愛を身につける以前まで彼を苦しめていた真空の問題とその原因、そしてその真空から彼が癒され立ち直っていく過程について論じてきた。ここでは、これらの議論の内容を振り返りながら、内村の「キリスト教的兄弟愛」の構図を明らかにしたい。

①名古屋英和学校での「キリスト教的兄弟愛」

内村が名古屋英和学校の教員だったころ、1896年10月アメリカのベル宛てに送った手紙の中には、「愛」(love)、すなわち「キリスト教的兄弟愛」(Christian Brotherhood)や「キリスト者の親交」(Christian fellowship)という言葉が力強く述べられている。キリスト者もっているすべてのものは神のものであり、それを信じる信仰のしるしとして自分のすべてを兄弟のためにささげなければならないという意味がこれらの言葉に潜んでいる。明治時代日本人のクリスチャンを代表する内村が教員として学生指導に当たっていたころの「キリスト教的兄弟愛」は、他宗教への寛大さなど一部を除けば当時福音主義的キリスト教の世界では一般的に受け入れられていた精神で、キリスト教主義学校の創設に携わっていた多くの宣教師たちの精神だったのであろう。そういう意味で彼の「キリスト教的兄弟愛」は名古屋英和学校をはじめ、当時のキリスト主義学校の建学の精神の源流と言えるのではなかろうか。彼が身につけるようになった「キリスト教的兄弟愛」の意味は、彼が日本で経験した真空の問題と、アメリカでその問題から回復していく過程を覗いてみることでより明確になる。

②真空の根本的な原因

再婚への欲求や不健康や罪意識など個人的な問題が内村の真空問題の背後にあると推測されるが、彼の内面にできた真空の直接的な原因は、例えば愛と友愛のない排他的な教派主義、すなわち礼拝堂建築過程においてメソジスト教会から脱会しようとする内村らに対して建築支援金の返納を求める教団の措置などが挙げられる。このような冷たい仕打ちを経験することで、キリスト教への懐疑を持つようになる。さらにそれは自分のキリスト者としてのアイデンティティに対する懐疑になって彼を苦しめるのである。そうして彼の内面に発生したのが何も無い空っぽの状態、真空の状態である。この真空は、キリスト教の本質やアイデンティティを失ってしまった当時の内村の内面の状態を物語る。そして、感情に頼るキリスト教の感傷主義に一時期傾くことで、真空は以前より大きく、鮮明になってくるのである。当時、幸いにもキリスト教の本質、すなわち実践的愛 (practical charity) に気付いていた内村は真空解決を求めてキリスト教国アメリカに留学に行く。しかし、墮落したアメリカ社会の一面を目にすると、真空は底なしの深淵として、つまり自力ではとても解決困難な内面の深い闇として、彼の意識の前面に浮上するようになる。このように、真空という魂の淵は、冷たく硬く非実践的で人間味のないキリスト教との出会いから生じ、キリスト教の本質 (愛) やキリスト者としてのアイデンティティを全く感じられない深いリヒリズム (虚無主義) の闇として理解されるのである。

③真空の解決

しかしながら、内村はペンシルヴェニアで一人の医師との出会いとその医師の施設での仕事を通して、慈善活動、友愛の精神、宗教的寛大さという温かくて優しい実践的なものを身をもって学ぶことで真空から立ち直っていく。それとともに、キリスト教の真理を悟り、喜びを感じるようになる。その後、内村は真空問題の解決への欲求や真理探究への渇きに促されて、その施設を離れ、大学に入学する。

ニューイングランドで大学生になった内村は、学長の信仰と人格に触れつつ、神の愛の中で罪の贖いと神の国に対する信仰的確信をもつ。信仰が深まるにつれて、以前より精神的に元気になり、あらゆる恐怖を退け、聖なる喜びを感じるようになる。それによって、真空という魂の傷はさらに癒されていく。こうした過程の中で内村は神に回心し、救われたという確信に至り、神の霊に満たされるという神の臨在を経験するのである。神の臨在は、回心と救済に対する確信の内的証拠であり、神との合一という神秘体験をもたらすものである。このような神の臨在は、彼にとって、何もない空っぽの状態である真空を満たし、癒してくれるものとして描かれる。彼の真空を満たす神の臨在は、慈善を行ってキリスト教信仰を具現化した学長を通して現れたと証言されるが、これは学長の助けを神の助けとして感じたというレベルの意味ではない。内村が学長を通して経験する神の臨在というのは、純粹にキリスト教的な経験、つまり、イエスキリストの十字架に潜んでいる神の愛と恵みによって真空が満たされ解決された経験のことを表す。神の臨在を通じて彼の真空を満たしたイエスキリストは社会と国の希望と命として強調されるが、その根拠として、キリスト教国における善を行う力と悪を制御する力が示される。これは個人のレベルだけでなく、社会と国のレベルにおいても役に立つ実践的なキリスト教である。慈善と友愛のないキリスト教的感傷主義や排他的教派主義、そして、異教徒に対して兄弟愛を持たず傲慢に振る舞う宣教は内村にとって実際のキリスト教ではないのである。

以上のように、信仰的かつ人格的な人から受けた慈善と友愛を通して内村は、実際のキリスト教、つまり、罪の贖いと救いの確信の内的証拠である神の霊の臨在をもたらし、善を行う力と悪を防ぐ力を養ってくれる真の宗教を知る。そして、この真の宗教の核心、実際のキリスト教の神髄であるイエスキリストは、愛すなわち実践的愛であるという確信に至るようになる。内村の真空は、実践的愛というキリスト教の本質（神髄）を欠けた（感じられなかった）状態であったが、その問題は人の愛から神の愛を経験することによって癒され満たされ解決される。こうして内村は失われたキリスト者としてのアイデンティティを取り戻すようになるのである。

5.2. 内村の「キリスト教的兄弟愛」の構図

名古屋英和学校の教師だったころの内村が熱く語った「キリスト教的兄弟愛」というのは、真空という魂の傷から立ち直る過程を経る中で体得した実践的愛にほかならない。内村の「キリスト教的兄弟愛」の構図は次のように説明できるであろう。

第一、内村が強調したように、実践的愛はキリスト教の本質であり、キリスト者のアイデンティティに関わるものである。この実践的愛の無さが真空発生の主な原因とされる。

第二、イエスキリストの十字架を通して現れる神の愛と罪の贖い、回心と救済、聖霊に触れられる体験（神の臨在）といったキリスト教的事柄は、実践的愛（友愛と慈善）を媒体として、真空のような魂の問題を経験する人に伝わり、それによって真空は満たされ、癒される。

第三、実践的愛を伴うキリスト教的事柄によって内面の真空を満たすというのは、内村にとって、神の愛を意味するイエスキリストによって真空が満たされることを意味する。

第四、実践的愛を伴うキリスト教的事柄によって真空が満たされることがイエスキリスト（神の愛）に満たされる意味として捉えられるということは、イエスキリスト（神の愛）への信仰が実生活において役に立たない抽象的であまいなものでないことを指している。つまり、イエスキリスト（神の愛）が現実において実際的な意味をもつのは、友愛や慈善を伴うからだということである。

第五、それだけではない。実際的な意味には、神との合一という宗教的体験による実生活への影響も含まれている。神との合一の体験は、神の臨在の中で自分が神を所有すると同時に、自分が神に所有されていることを感じる一種の神秘的な経験である。この経験の中で神からすべてを与えられ、自分のすべてを神にささげたいという純粋な信仰（実践的愛の原動力）に至る。

第六、神との合一の体験から得た信仰は、神にすべてをささげると同時に神からすべてが与えられるという神との関係性に基づいて、イエスキリストを信じる信者間関係性もそうでなければならないという課題を含むようになる。これがすべては神のものと信じ、兄弟に自分のすべてをささげるという内村の「キリスト教的兄弟愛」の実体なのである。

第七、ここで、実践的愛、イエスキリスト（神の愛）、神の臨在、神との合一の体験、「キリスト教的兄弟愛」、善を行う力と悪を防ぐ力という事柄が、内村の中では決して切り離されることなく、密接に結びつけられ、統合され、相互浸透されているという構図が明らかになるのである。

6. 内村の「キリスト教的兄弟愛」から学ぶ建学の精神の実現（ミッション）について

現代のキリスト教主義学校が内村の「キリスト教的兄弟愛」から学ぶ、建学の精神の実現というミッションには2つの根本課題があると考えられる。一つは「キリスト教的兄弟愛」を理解している人材、つまり筆者が思うには名古屋学院大学の伝統から見られる健全で純粋な福音主義者のような人材をどう確保するかという課題である。もう一つはその人材と学生との出会いの場をどう広げるかという課題である。前者は神との関わりに基づいて「キリスト教的価値をどう受け継ぐか」という課題に関わり、後者は人との関わりにおいて「キリスト教的価値をどう広めるか」という課題に関わる。この二つの課題がキリスト教主義学校の伝統的なミッションであり、建学の精神の根本にあるものと考えられる。

6.1. 学校においてキリスト教的価値をどう受け継ぐかというミッションについて

十字架がついているチャペル堂や毎週行われている定期的礼拝（週3回）、1年生を対象としたキリスト教関連の必修科目、毎朝授業開始前にキャンパスに鳴り響いているキリスト教関係の音

楽、学内のいくつかの箇所に掲げられている建学の精神「敬神愛人」の看板、毎年行われている宗教講演会をはじめとする数々のキリスト教的諸活動などは、名古屋学院大学が名実ともにキリスト教主義学校であることを示すものである。このキリスト教主義教育の現場において、できるだけ多くの学生をチャペルに案内し礼拝の空気に触れさせたり、授業を通しては聖書やキリスト教的事柄を教えたりすることで、建学の精神が学生たちに浸透することが期待されている。

これらの象徴物と諸活動によってキリスト教主義教育が行われてきたわけであるが、これぐらいで十分だといえるであろうか。満足できるものであろうか。従来のやり方と意識でやっていけば特に問題ないのであろうか。特にキリスト教信者を養い牧師を養成する教育目標を掲げている教育機関ではないため、それぐらいでいいと判断するキリスト教関係の教職員もいるであろう。

キリスト教信者の数が減っている時代の流れとともに、非キリスト信者の学生・教職員を配慮して、宣教・伝道・救いなどの宗教的な意味合いを少しずつ薄めてきたキリスト教主義学校の教育現場で、明治時代名古屋英和学校の教師だった頃の内村鑑三が語った「キリスト教的兄弟愛」の宗教的側面を強調し、伝統的なミッションを果たそうとすることは、今に至ってはそんなに求められていないようなものなのかもしれない。そして、伝統的なミッションを避けたり、遠回りしたりするようなやり方が礼儀で教養であるという認識がいつの間にか広がり、固着してきたような感じもする。

しかしながら、内村が強調したように、宗教的事柄を含んだこの「キリスト教的兄弟愛」は、キリスト教の本質とアイデンティティに関わるものである以上、キリスト教主義教育を行う学校においては何らかの形でそれを受け継いでいかなければならないのではないのか。このミッションを果たしていく際に、特に心配なのは、「キリスト教的兄弟愛」の本来の意味を理解している教職員の数が減っているということである。もし、それを理解する教職員が誰も存在しないとしたら、それこそがキリスト教主義学校における真空というものではなからうか。そういう意味で宗教的側面を保つことはとても大事なことである。だとしても、アイロニカルなことに、学校で信教の自由を守らなければならない側面を考慮すると、宗教的側面を伴う伝統的なミッションが全面的に強調されるのは現実的に難しく、キリスト教的精神を建学の精神としている側面を考慮すると全く要らないと言われるのも困るわけである。すると、全面的に強調するのも全くいらぬと言われるのも困るという現実的問題を解決するためには、どうすればいいのだろうか。最も基本的な対策は、「キリスト教的兄弟愛」の意味を正しく理解し、その愛を実現しようとする意欲のあるキリスト教関係の教職員の採用であろう。これが言うまでもなく建学の精神の実現において欠かせない要素であろう。

現在日本で教員公募においてほとんどのキリスト教主義大学は、牧師の資格を応募条件として出している。牧師の資格というのは「キリスト教的兄弟愛」といったキリスト教の基本的な価値を信奉していることを保証するものであろう。ところが、牧師であってもキリスト教の基本的価値について十分な認識をもっていない者もいれば、牧師でない者の中にもキリスト教の愛に生きる者もいるという可能性は否定できない。キリスト教関係の教員選考において難しいところはこういう客観化されない教員の信仰的素養などにあると考える。そのため、学位や研究業績や牧師

資格という客観的な基準の上に、すでに採用されたキリスト関係の教員の意見を教員選考の材料とするであろう。しかし、もし採用された教員がキリスト者らしくなく、その行動に学校への献身やキリスト教的愛が欠け、権威主義的な側面が目立つとしたら、学校内でキリスト教関係の教員への信頼だけでなく、キリスト教教育の必要性に疑問を感じる人たちが出てきても不思議ではない。そのような実態は、キリスト教教員選考において、キリスト教関係の教員の意見に頼らない、非キリスト教徒の教員による選考が行われる時代の到来を招き、さらに問題を複雑にすることもありうる。内村の「キリスト教的兄弟愛」における宗教的価値を正しく理解し、伝統的なミッションを行おうとする教員の採用を今後どうするかは大きな課題であるに違いない。

6.2. 学校においてキリスト教的価値をどう広めるかというミッションについて

内村の「キリスト教的兄弟愛」から学べるもう一つのことは、「キリスト教的兄弟愛」を理解しているキリスト教関係の教職員と学生との出会いの場や小さな交わりの場をどう広めていくかという課題についてである。

- ①このような出会いと交わりの場の拡大は、「キリスト教的兄弟愛」を大事にする人たちを少しでも増やしていきたいというミッションを含意し、それはもともと建学の精神の根底に存在しているものと考えられる。信教の自由を守り、他宗教を尊重することをも学ぶキリスト教主義大学において、キリスト教を無理やり勧誘することはしてはいけないであろう。しかし他方、内村鑑三のように「キリスト教的兄弟愛」という崇高な精神を有し、日本だけでなく世界にも必要なキリスト教的人材を少しでも多く輩出しようとすることは、キリスト教主義大学の社会的責任の一つではなかろうか。嫌な思いをさせる宗教的勧誘は当然いけないことであるとしても、社会への貢献として善を広め悪を退くために生きるキリスト教的善人を一人でも多く社会に送り出すことは今の時代には忘れかけているミッションであると考えられる。そのミッションの前線にキリスト教関係の教職員が立っており、彼らを通してキリスト教的愛を学べる交わりの場からミッションの萌芽が始まることを忘れてはならない。
- ②このようなミッションは、内村が経験したように、実践的愛（慈善）を伴わなければならない。そうすることによって、大学の大多数を占める非キリスト者の学生と教職員の共感と同意を得ることができるであろう。それだけでなく、キリスト教的価値や建学の精神を今の時代に合わせて解釈し、それを具体化し発展させることができるであろう。
- ③ミッションに欠かせない愛の実践には、出会いが必要である。そして出会いは交わりに発展していかなければならない。毎週行われているチャペルの時間を出会いと交わりの場にする 것도可能である。そのためには、学生によるチャペルの運営（司会、案内、奏楽、奨励など）を試みる学生の積極的な参加を図る一方、チャペルの後、簡単なティータイムを設け、その交わり会を大事にしていくという方法も考えられる。
- ④このような交わり会が定着するようになると、その交わり会から慈善活動キャンペーンを少しずつ広めていくことも可能である。
- ⑤こういう慈善活動への関心と共に、キリスト教関係の教職員は学生への愛の実践にも関心をも

たなければならない。すべての学生に対して具体的な愛を行うことは無理なことなのかもしれない。しかし、学生たちがそれぞれの悩み事や心配事を抱えているということを常に認識しながら、できるだけ多くの学生に寄り添い、彼らの声に耳を傾ける機会を増やそうとするキリスト者としての基本姿勢は求められるものではなかろうか。

- ⑥そして、支えや助けを必要とする学生のニーズを明らかにし、それに対してキリスト教的兄弟愛を具体的にどう表現するか、その方法を模索する。場合によって教職員の間で情報交換と議論が必要であろう。
- ⑦学内の学生を対象とするキリスト教的兄弟愛の実践の一つのアイディアとして、キリスト教関係の教職員による小規模な奨学金基金の設立が挙げられる。
- ⑧そのほかにも、内村の「キリスト教的兄弟愛」に学ぶ際、友愛のある交わりの場と愛の実践のためにキリスト教教職員が心がけるべき心得は次のようなものがあるであろう。
- a. 人種や教派などを問わず内村に友愛の精神を示した障害者施設の院長と大学の学長の行いのように、キリスト教的愛は非キリスト者の学生を同じ家族や兄弟として認識し、彼らの宗教的背景などを尊重し、そこから学ぼうとする姿勢をとる。
 - b. キリスト教の実践的側面から内村が悟った善と悪への理解、すなわち善を愛し悪を防ぐ力を養うということも「キリスト教的兄弟愛」の根底にあるということを知る。
 - c. キリスト教の信仰を郷土愛や愛国心の涵養に活かした内村の精神は、建学の精神の実現における一つの方向性を示していることを忘れない⁹¹⁾。
 - d. 相反するように見えるかもしれないが、経済的に困っているキリスト教の兄弟と分かち合うことを強調する内村の「キリスト教的兄弟愛」は、独立教会の設立過程⁹²⁾で見られたようにできる限り他人に頼らず自分の力で自立することを重んじる内村の独立の精神と決して矛盾していない。むしろその二つは密接に関わっていること、つまり「キリスト教的兄弟愛」は独立の精神を養い、独立の精神は「キリスト教的兄弟愛」を支えるということを知る。
 - e. キリスト教信仰を強いることはできないが、愛の行為を通してその信仰につながる可能性は常に開いておく。内村は他人から慈善を受けることによってイエスキリストの十字架を通して啓示された神の恵みと愛、回心と救済、聖霊の導きと神の臨在といったキリスト教信仰の核心的事柄を悟る段階に導かれた。そのように、身体の必要を満たす物質的支援と魂の飢えを満たす霊的支援の合体がキリスト教信仰の神髄に触れる段階へ高めることを忘れない。
 - f. 内村にとって建学の精神「敬神愛人」の現代化は「祈りつつ働き、感謝しつつ学ぶ⁹³⁾」であ

91) 例えば、内村は日本の国民性は神の賜物であるという認識をもち、それをキリスト教の中で活かそうとしていた(124頁)。そのほかにも郷土愛や愛国心についての彼の考えについては次の箇所を参照せよ。

“How I became a Christian: Out of my diary” (『内村鑑三全集3』, 77-78, 92, 101-102, 108, 124頁。

92) 次の箇所を参考にせよ。同上, 55, 65, 66-67頁。

93) 藤巻孝之, 前掲書, 156-158頁

るが、今の時代における建学の精神の現代化の意味を問い続ける。

6.3. キリスト教主義大学の本質やアイデンティティに関わる二つのミッション

以上のように、内村の精神に学んでキリスト教主義学校の建学の精神を実現していくにあたり、特に重要な二つの課題（ミッション）、すなわち「キリスト教的兄弟愛」を理解している人材の確保と、その人材と学生との交わりの場の拡大について考察してみた。そのほかにも建学の精神の実現にはさまざまな取り組みが必要であろうが、この二つの課題は、おそらく多くのキリスト教信徒の教職員によって運営されていた時代には、自然に共感・共有されていた根本課題であろう。いつの間にか時代が変わり、ほとんどのキリスト教主義学校において非キリスト教徒の教職員の割合がほとんどを占める今の状況にいたっては、これらの伝統的で宗教的な課題への関心は学校運営の中心から遠ざかりつつあるかもしれない。しかし、建学の精神の根底にあるもの、すなわちキリスト教主義大学の本質やアイデンティティに関わるものを支え、維持・発展させる課題において欠かせないのは、これらの伝統的なミッションであるに違いない。学生たちのチャペル参加やキリスト教科目履修など表のキリスト教主義教育の背景にあるべきものもこのミッションなのではなからうか。

7. おわりに

本研究は、名古屋英和学校を前身とする名古屋学院大学の建学の精神「敬神愛人」の源流を辿ろうとする試みである。特に「敬神愛人」の源流の一つとして、明治時代名古屋英和学校の教員だった頃の内村鑑三が語っていた「キリスト教的兄弟愛」を取り上げた。そして、その意味を明らかにするため、彼が愛のないキリスト教に躓くことによって経験した真空という内面的挫折の実像と真空問題の解決過程とを分析した。また、真空問題の解決過程において内村がキリスト教信仰の神髄を悟り、キリスト者としての確固たるアイデンティティを見出すようになったことについて紹介した。さらに、これらの議論を通してその意味が明らかになった内村の「キリスト教的兄弟愛」が名古屋学院大学の建学の精神の底辺に流れる精神を成しているということに触れつつ、今日建学の精神の実現において忘れてはならない根本課題について考察してみた。

われわれは建学の精神の源流に含まれる内村の「キリスト教的兄弟愛」を通して、キリスト者の教職員の数が著しく少なくなってきた今の時代に、キリスト教的精神が教育活動においていかなる意味をもつかについて、伝統的なミッションの見地から根本的に考えることができたのではなからうか。そして、学校と社会においてキリスト教精神がなぜ必要なのか、についても内村の経験から得られた確固たる根拠を通して理解できるようになったのではなからうか。内村のキリスト教的精神への正しい理解は、今もなお、名古屋学院大学をはじめ、日本の多くのキリスト教主義学校の建学の精神の実現に携わる教職員に確かな根拠と確信をもたらすに違いない。

名古屋英和学校の創設者クライン博士は、学生と社会に及ぼす良き影響への揺るぎない確信をもって「敬神愛人」を建学の精神として学校設立と学校運営に尽力していたであろう。そして、

長い歴史の間、クライン博士のその意を受け継ぎ尊重する数多くの教職員によって、建学の精神は守られ、学校発展に生かされたであろう。

人間の命の根源である神の息（神の霊）に導かれた学校創設者のこの spirit が学校運営や教育活動全般に行き渡って息づき、学校に存在意義と活力を与えるように働きかけること、そして、この spirit をもつ学生を一人でも多く社会に送り出すことによって金や物にすべての価値を置く拝金主義的風潮に流されず、善を行い、真理のような非物質的価値を重んじる社会になるように働きかけることは、学校存立の理由であり、根本的なミッションである。これは正に内村の「キリスト教的兄弟愛」のような宗教的概念に基づいており、それを認識することは、建学の精神の実現において欠かせない部分である。

立派な現代式キャンパスから約100年という隔たりのあるあの時代の建学の精神を眺めると、古くて地味な宗教臭いもののように見えるかもしれない。しかし、それは懐かしい生まれ故郷のような原点であり、成長の土台であることには変わらない。その原点と土台を忘れないこと、さらには現代に合った形で継承・発展させようとする努力は、この学校に属する教職員皆に求められるものであろう。